「北の海へ」出版にあたり

「北の海へ・新潟港の明治大正昭和」という本を出版する事となった。この7月26日発売になっているので、すでに書店には並んでいる。

実は本を出そうと思ったのは去年の事だ。新潟人が明治期、小さな帆船で沿海州、樺太、カムチャッカにまでサケ、マスをとりに行ったことが、地元新潟でほとんど知られていないからだ。それを担った漁業家の子孫は今もこの新潟に居る。何か伝え聞いた話もあるだろう。なぜそれが知られていないかというと、それが現代に継続していないからだ。

1889年（明治22）初の直航貿易でウラジオストックから51トンのサケ、マスを新潟に持ち帰った時から、1932年（昭和7）の個人漁業家の大合同、北洋合同会社設立まで43年間しかない。時代の端境期に咲いたあだ花のようなものだ。そしてそのことを記したものが、53年前に出版された内橋潔著「新潟県北洋漁業発展史」だけである。このままでは新潟の歴史が忘れられてしまうと思い、本にまとめる事にした。

今年が新潟開港150年にあたるので、今年の1月にはと思っていたが、とうとう7月末になった。それでも無謀なほど超特急で作ったものだと思う。しかも私たちに歴史学の素養があるわけでもなく、全ては「泥棒を捕まえてから縄を綯う方式」いわゆるドロナワ式である。恐れ知らずの素人の所業だ。

実際やってみると、その無謀さが初めてわかった。次々と分からないことが出てくる。それを調べないと次にいけない。文字通りのドロナワ地獄だ。本はみなとさがんプロジェクト実行委員会で出すこととなった。この港左岸から北洋への船が出たからだ。ライターの橋本啓子さんという強力な助っ人の力を頼り、何とか完成に漕ぎつけた。

この「北洋」いう言葉だが、その当時新潟では「北洋漁業」とは言っていない。「北洋」の名前が出るのはもっと後で、ほとんどの新潟の漁業者が撤退した後である。当時は露領漁業と言った。そのため北洋の言葉はできるだけ使いたくないのだが、新語を作っても訳がわからなくなるので使っている。そして題は「北の海へ」とした。

一般に北洋漁業の意味するものは母船式遠洋漁業であり、それはオホーツク海、ベーリング海でおこなわれた。本書の対象となっている漁業は陸揚げ塩蔵漁業で、日本海、オホーツク海での沿岸漁業だ。

当時の漁法は、沿岸に番屋を設け、定置網をしかける。網に魚が入ると小舟を出し、その網を上げる。サケ、マスなどは陸にあげ、海岸に張り出した作業小屋でワタを抜き、塩蔵する。ニシンは大きいものは身欠きニシンとして干し、小さいものは煮て漁油を搾り、搾りカスを肥料とした。

そのほかに「買魚という漁」がある。

代表取締役社長

鈴木英介



沿岸のロシア人漁場、あるいはアイヌ人漁場からとった魚を買うのである。ただ、その船には網が積んであり、魚がいればその網を入れ自ら漁をする。（これは密漁）たびたびトラブルになったのはこのやり方である。

こんなやり方がなぜ長く続いたかというと、ロシアにしても魚を捕っても極東には人が少なく、日本人しか買い手がないため、片目をつぶっていたのではないだろうか。また名義だけロシア人の漁場とし、手数料を支払い、実質的に買い取りに行った日本人が魚を捕るということも行われた。実際のロシア人の漁場でも、働いている人は日本人か中国人ということも多かったようだ。

船は新潟から漁夫を北洋に送り込む事と、漁期が終われば塩蔵した魚と人々を新潟に連れ帰る事に使われた。そのため速度は遅いが、積載量の大きいベザイ船型和船が便利であった。ベザイ船には水密甲板がないため、波には弱いが多くの荷が積める。日本海の航行だけを考えればそれで充分だった。

その陸揚げ塩蔵漁業が、船団を組んだ母船式沖合漁業にとってかわられることになる。付属漁船（独航船）が集めた魚を次々と母船にあげ、缶詰製造まで行う。あるいは母船は多数の独航船で集めた魚を北海道の工場に一気に運び、素早く缶詰にする。そうすればロシアの土地は使用しないので借区料も必要なくなる。

缶詰の優位性は、北洋地域では白サケより油の多い紅サケが多く、その油のため塩蔵では悪くなりやすいこともあった。また紅サケの好まれるヨーロッパへの輸出のためには缶詰しかない。

新潟の漁業者も缶詰を手掛けようとした者もあったが、資本力と技術力が必要でなかなかうまくいかなかったようだ。露領漁業が北洋漁業に代わり、その拠点は函館に移り、次第に東京大手資本の独壇場となってくる。

1932年（昭和7）の北洋合同会社設立は新潟の個人漁業家を合同会社に集め、さらに日魯漁業と合併させることを目的とした。結果的には新潟の北洋漁業は終止符を打つ事になった。さらに太平洋戦争の戦況の悪化により、次第に漁業どころではなくなってきた。

1932年という年は満州事変の翌年であり、次第に時代はきな臭くなってくる。当家で北洋漁業を始めた、間瀬屋八代鈴木佐平（正作）はその年に死んだ。六四歳であった。

間瀬屋は北洋合同会社には加わらず、日本領であった樺太南部の3か所の漁場を経営している。間瀬屋九代鈴木佐平（貫一郎）は1938年（昭和13）の雑誌のインタビューで樺太漁業の不漁を訴え、その原因を無秩序な森林伐採とパルプ工場の汚水の垂れ流しの為であると指摘している。時局はますます暗く、日本政府の方針も中国と南方に向かい、北の海は見捨てられることになる。

海でつながる「にいがた」
～北洋漁業と間瀬屋

○11月19日～12月1日
○旧齋藤家別邸　蔵ギャラリー
写真：鈴木佐平「樺太漁場の思出」
動画：5代齋藤喜十郎撮影